

てんかん学ハンドブック 第4版

兼本浩祐(著)

岡山大学大学院教授・精神神経病態学

山田了士

さらにわかりやすく深化した、
てんかん学の名著

日本のでんかん臨床は、小児科、脳神経内科、脳神経外科、精神科の4科が一定の棲み分けをもってかかわっている。しかし残念なことに、てんかんはこれらの診療科の診療や研究の中心的な対象とは言い難く、卒前教育でもてんかんを学習する機会は限られている。これは日本で100万人と推定されるてんかんのある人々とその家族にとって、非常に困ったことである。ただ幸い、てんかんに関心を持つ医療者はかなり増えてきているので、ここはぜひとも、最新のでんかん学をわかりやすく伝道してくれる書物が必要である。

そこに、兼本浩祐教授の『てんかん学ハンドブック 第4版』が、内容も装いも大きく「深化」して再登場した。初版以来20年以上も読み継がれてきたてんかん学の名著が、新しいiPhoneのように今の読み手のニーズを捉えている。

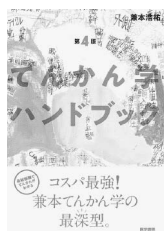
本書の序文に、「第1章がマスターできれば成人てんかんの8割は理解できる」と書かれている。手ほどきのでんかん群分類は、臨床経過と治療の視点に基づき、極めて合理的でわかりやすく、いわば兼本てんかん学の骨子である。それを理解した上で頻度の高いいくつかの疾患に絞って習熟すべきという見解に深く賛同したい。続く第2章では、多様なてんかん治療が実践的に紹介され、爽快でさえある。ここまで読めば、とにかく何とかできそうと勇気が出る読者は少なくないだろう。第4章以降でてんかんのあらゆる知識が網羅されている。中でも白眉は第4、5章にみられる鑑別診断で、てんかん以外の疾患も含んだ見事な鑑別リストを読むことができる。臨床記述はこうでなくてはと思う。

著者の真骨頂は、複雑な事象をシンプルにシェー

マにまとめ上げる手腕だと思う。これらの図表は、整理された構造によって直感的な理解に導き、読者は迷い道から抜け出たような体験を得られる。この第4版では、こうしたシェーマが一層パワーアップしてたくさん挿入されているのがうれしい。そのため、第5、6章のような辞書的部分でも常に明快である。てんかん学はわかりにくいという方は、これらの図表を見てぜひすっきりとしてほしい。

本書のもう一つの特長は、豊富なコラム群である。この第4版では34にのぼる症例群がコラム形式で各所に挿入され、大いに理解を助けてくれる。巻末に紹介されたガストーの手紙にある「(てんかんは)臨床によってしか理解できないことがら」という言葉の意味を実感する。臨床メモなどのコラムでも、一度読んだら忘れない臨床の実践知に触れることができる。著者は読み飛ばしてもよいと言うが、もったいない。つまみ食いするだけでも必ずや読者の臨床力が上がり、てんかんへの洞察が深まるであろう。

第4版で装丁が大きく変わり、本文の書体も読みやすいモダンゴシックになった。紙質の手触りが心地よい。若手ベテランを問わず、てんかんに少しでも関心のある方には、全国100万の患者さんのためにもぜひお読みになることをお勧めする。



●A5/頁446/2018年
定価：本体4,000円＋税
[ISBN978-4-260-03648-1]
医学書院 刊